



(社)三原青年会議所は、10月24日(水)、ボボロ(三原市芸術文化センター)にて、三原市長 五藤康之氏をお招きし、雑談も交え和やかな雰囲気のカレーライス会を開催いたしました。

行政のトップである三原市長に、これからの三原における行政の展開等を聞くと共に、(社)三原青年会議所の活動に対する評価をいただき、活動をさらに円滑に行えるような会になりました。

※カレーライス会とは、(社)三原青年会議所の理事役員が三原市長と一緒にカレーを食べながら、三原の将来について語り合う恒例の懇談会です。

をしなければ減り続けます。Uターン・Iターンということで定住促進という政策を進めていますが、一度に多くの方が移り住むなり、帰ってくるとは考えられません。即効性があり効果が大きいのは大企業の誘致だろうと考えております。災害が少なく、交通の便が良いことを活かし、推進しております。

市長 私自身、世の中で起きている状況を見て感じることは、学校の責任についていろいろ言われてますが、学校にも限界があって、家庭と学校のそれぞれが役割分担してゆくことが大切だと思いますし、教育の基本は家庭にあるものだと思います。しかし核家族が増える等の状況で難しい部分もあり、市役所でも放課後子ども教室を受け持つなど様々な取り組みをしております。また青年会議所の皆さんが取り組まれているように家庭でできないことを地域の大人で補ってゆける形が出来上がれば素晴らしいと考えます。



JC 旧三原市のころから6年間、市長を務められてこれでしたが、市長として、三原市として取り組んでゆきたいこと、今後実現させたいことに対して壁になっている部分がありましたらお聞かせください。

市長 合併してから、私が最もすべきことは、新市としての一体性を図るということだと考えます。それから基本的に合併時に策定した新市建設計画やそれに基づく長期総合計画に則って実施計画を毎年作っております。その中で大きな壁というのはなく、ほぼ予定通りに進んでいるように思います。

JC 全国的に10万人クラスの市では人口は減少しており、三原も決して例外ではありません。三原市の現人口が、出生率・転入率に比べて、死亡率・転出率が多いのと、高齢者のかたの比率が多いという印象がありますが、どのようにお感じですか。

市長 18年度の三原市では、418人減っています。それを細かくいうと生まれた人が790人、亡くなったかたが1,095人、転入が3,212人、転出が3,325人、差し引き418人減っています。やはり、まず人が集まること

JC 三原の未来にとって一番の課題は子どもたちに関することだと考えます。そこで、少子化問題に対してどのようにお考えですか。

市長 現在の15歳未満の比率は、12.9%と非常に低いのです。そこで今年から「三原市いきいき子育て支援プロジェクト」を実施しています。これは子育てを応援をする事業で、例えば乳幼児の医療費助成があります。これは乳幼児医療費の助成対象を小学校卒業まで拡大して、個人負担を1回500円までとしています。また、面倒をみることもできる方、みて欲しい方の双方を登録制にしたサポート支援(ファミリーサポートセンター)も今年設立しました。また、大和では幼稚園機能と保育所機能を統合させた新たな取り組みなど、子どもを育てやすい環境づくりにも積極的に取り組んでいます。

JC 不登校の問題や青少年犯罪の問題を解決してゆく上で、大人たちがもっと情熱を持って子どもたちに接する必要がある、また子どもたちに道徳心を伝えてゆくことが必要であると我々は考え事業を行っておりますが、どのようにお考えですか。

JC 地域支援センター設置および強化が住民へのサービス向上、また市民参加型のまちづくりになるのではないかと考えますが。

市長 JCの作られたビジョンの中でも訴えられていますね。地域支援センターのビジョンなどを私も読ませていただいております。各小学校区で設置できれば、地域密着性の高い、市民にとって身近で様々なサービスを提供することができます。現在、協働のまちづくり指針をつくっておりますので、ぜひ参考にしたいと思っております。

まとめ

「魅力あるまち」とは何でしょうか。勤務先が三原でありながら、周辺都市から三原に通われている方がいることは事実で、三原に住まないのは、映画館、ボウリング場などの娯楽施設がないためという理由も多いそうです。三原市は交通の便にしても、観光資源にしても他都市に比べて恵まれていると思っております。市民みんなが財産として気づき、ひとりでも多くの方が「まちづくり」に興味を持ち、三原市民が一体感を持ち、それらを活用してゆく、また創ってゆくことが今後のまちづくりの中で重要なことであると考えます。

みたがきいたが
今年も残すところ一ヶ月あまりとなり「今年を振り返る…」そんな時期が近づいてきた。今年よく耳にした言葉で「鈍感力、ナントカ還元水、偽装、ハニカミ王子」等がある。その中でも「食の安心・安全」を完全に裏切った偽装問題。◆その偽装を行った役員

が「みんなも同じことをやっている」といった言葉が、これだけ相次げば今では真実味を帯びる。だが「バレなかっただけだ、みんなやっていることだ」といった声が、消費者から聞こえて来るのも事実である。消費者には、情報や消費・賞味表示を信用する以外、安全か安心なのか確認する術を持っていない。◆移転計画が進む三原市

新庁舎の在り方を考える新庁舎建設整備検討会が発足した。その検討会には公募の市民も含まれており、市民アンケートも実施されることから、行政単独で計画を進めておらず、協働で行おうとしている様子がうかがえる。だが「移転を何故行う必要があるのか、何が変わるのか、税金の無駄使いだ」といった声が市民から聞こ

えてくるのも事実である。◆行政側は市民へ新庁舎移転計画に関する情報を積極的に公開し、お互いが経緯構想を理解した上で進めてゆくことが必要である。そうすることで、市民からの信用を得て、祝福される新庁舎になるのではないのだろうか。